

## ●特集●

## 東アジア諸国との交流

～韓国幼児教育学会・韓国嬰幼兒保育学会との学術交流を記念して～

今後、近隣諸国との学術交流が盛になると期待される。そこで、特集では、日本保育学会会長として参加された韓国幼児教育学会国際会議についての小川会長の報告と、これまで、さまざまな形で学術交流をされてきている会員に、あくまでも一人の保育研究者としての立場からご執筆いただくこととした。

### 韓国幼児教育学会国際学会に参加して

小川 博久

昨年10月20日から22日まで、韓国幼児教育学会主催の国際学会に招聘され、20分の講演（英語）を行ってきた。大会はソウル女子大学の美しいキャンパスで10月21日と22日の2日間行われた。

韓国幼児教育学会会長の文美玉（ムン・ミオク）会長とは一昨年、立川で初対面し、その後、文書や、メールの交換で、学術協定を結んでいた。韓国嬰幼兒保育学会とも、その前年学術協定を結び、一昨年、大阪で国際大会を開催した折には、私は個人の資格で講演（日本語）を行い、韓国語同時通訳が行われたものであった。その時と同じ内容のものを英文の論文とし、そのペーパーを私が読み上げる形でおこなわれたが、同時通訳がすばらしかったらしく、私の講演内容は適確に聴衆に伝わったようで、内容が子育てで不安の要因と少子化問題を扱ったものであったので、韓国も少子化の状況にあるため、共感をもって迎えられたようであった。会長の文教授は、初めの出会いがお互いにとても良かったせいか、大変、私を厚遇して下さり、お茶の水女子大学で修士号を取得した大田（デジョン）市の牧園大学の白（ベク）教授を、金浦空港での私の出迎えから23日の同所からの見送りまで、三日間、車つきでエスコートにつけて下さり、心から恐縮した次第であった。白教授は、40代の日本語も英語も極めて堪能な方で、韓国教員大学の趙教授のもとで、教師教育で学位をとられたとても優秀な方であったので、3日間、あらゆる話題の交流をすることができ、共感することも多く、語学の壁を感じることなく、

研究者としての豊かなコミュニケーションができたことは、とてもうれしいことであった。

さて、この度の国際学会で痛感したことの1つは、この文会長を中心として、趙（チョウ）副会長、白教授等、40代、50代の日本でいえば若手の研究者が、この学会を引っぱっていているという印象であった。韓国の場合、アメリカで学位をとった研究者が多く、韓国独自の文化や研究が薄いというわさを私は耳にしたことがあったが、たしかに、英語の堪能な研究者が多く、若手の中に、ポスト・モダンの欧米の研究をただ受け売りでしゃべっているという人はいないわけではないにしても、この文教授、趙教授、白教授などは、自国で学位をとられ、韓国独自の研究分野を切り開こうとする新たな研究の胎動を実感することができた。特に文教授は、『韓国の伝統文化と幼児教育』という著書が韓国の推薦図書となっており、名古屋市立大学の丹羽教授によって翻訳されると聞いている。また趙教授は韓国教員大学の教授で教師養成研究では、若手を引っぱっており、若手研究者が趙教授の研究室に集い、活発な議論を展開しているとのことである。

今回の国際学会は、世界の研究動向を見すえながら、現代の韓国の教育現実と向き合い、現代社会の幼児教育問題をターゲットにしようとする意図がうかがわれ、ポスト・モダンの視点から、つまり、近代社会の枠組みを作り出したヨーロッパの文明の基準を批判的に検討する視点から、現代の韓国をそしてアジアを見直したいという意図を伺うことができた。それゆえこの国際学会のテーマもTranscending modernity in early childhood education and care（保育における近代を超えて）であり、協賛したOMEPのシモンシュタイン総裁（Selma Simonstein）も、祝賀講演の中でピアジェの発達観の普遍性を支持することは出来ないこと、多様な文化的背景を考慮せざるをえないことを指摘しており、この大会の基調講演者のダールバーグ教授（Gunilla Dehlberg）は、A pedagogy of welcoming and Hospitality built on Listening : An Ethical and political perspective on Early Childhood Education,（聞くことの基底にある歓迎と厚

遇の教育学、幼児教育視野における倫理的・政治的) というテーマで、J.デリダやG.ドゥルーズ、E.レヴィナス、M.フーコーなど、現代フランスの哲学者たちの言説を引用しながら、個人と個人という関係を、固定化した個人像を確定した上で考えるのではなく、お互いの対話過程の中で相手の働きかけに耳を傾け、かわり続ける関係の中において、相互の他者性が立ち表れてくるのであり、その関係は、意味や論理の交換である前に、もっとあいまいな、特に比喩的な、そしてリズムカルな関係なのだといったことを主張したのである。それは、近代社会が確立した近代的個性という理念を問い直すことを求めており、むしろ、アジア的共同体がもっていたものへの振り返りを示唆しているかのようであり、近代という名において、ヨーロッパ文明を規範として、後進国であったアジアを近代化の名において欧米化してきたアジアに、反省を促す視点を提供するものであったかもしれない。文会長の私に対する厚遇も単にプライベートの感情というより、大会そのものの基本姿勢に裏打ちされていたものであると解すべきであろう。

しかし、いずれにせよ、文会長の今回の招聘とスタッフの御厚意に対し心から謝意を表したい。

終わりに、日本保育学会（第60回大会）には文美玉会長を招聘することを計画している。今後、学会大会に限らず、様々な学術交流を活性化することで、日韓の様々な面において豊かな実りを生むことを祈りたい。

次に印象に残ったことは、この国際学会を隔年に開催するこの学会の力量である。学会開催の垂幕には、サムソンなど韓国の財界や財団の後援があることが伺われる。こうした点で日本保育学会も、経済大国でありながら、外国の研究者を招聘するにあたって財政上の問題に頭を悩ます日々を考えると、そうした財界からの支援が得られる努力をしなければならないという想いを強くしたのである。最後に、韓国の場合、韓国幼児教育学会がイコールOMEP（世界幼児教育会議）の韓国代表になっていることがこうした国際学会を開催する自然な流れを作っていることが伺われる。日本からも、日本保育学会会員でもある上垣内会員、入江会員、森会員（事務局長）がOMEP日本委員会のメンバーとして参加している。これまで、日本保育学会も庄子雅子旧会長、津守真旧会長などOMEPのメンバーとしてこうした国際学会に参加してきた。こうした歴史を考えると、日本保育学会とOMEPとの連携も今後、考慮すべきことが確認された。

## 東アジアの鏡に自分を映してみる

佐々木 宏子

2006年9月から2007年1月までの5ヶ月間、北京師範大学珠海（Zhuhai）分校教育学院に教授として赴任しておりました。私の滞在中に開学5周年を迎えた新しい大学ですが、14の学院（学部）に学生約1万5千人が学んでいます。一年中、ハイビスカスやブーゲンビレアの咲き乱れる美しく広大なキャンパスは、自然が豊かでした。担当科目は、子ども文化論（Children's Culture）と乳幼児の言語発達論（The Development of Young Children's Early Literacy）の2科目で、HP（<http://www.tv-naruto.ne.jp/sasaki/>）ですでにシラバスを公開していますのでご覧ください。

今回の経験でもっとも面白かったことは、教育学院の要請で英語で授業を行ったことでした。珠海分校では授業言語としては中国語と英語が指定されています。私のアシスタントとして英語科出身で心理学の修士過程を修了したばかりの朱火紅先生が、講義の準備から学生への中国語の通訳まで、すべてに関わってくれました。

例えば、日本の文化にあって他の国にはあまり存在しない「紙芝居」や「赤ちゃん絵本」についての講義や実践的試み（読んだり、学生がグループで制作したり）は、授業者主体である私にも実に多くの問いかけを必然的にもたらすことになりました。日本人である私や日本に住む学生には、当たり前のように「存在」し「了解」されていることを、中国の学生達からの活発な質問に答えるためには、私の中の既成の知識や伝達の構造を抜本的に組み変えなければならなかったのです。しかも、日本語であればいつものように日本語で話し、それが中国語でどのように翻訳されているかなどは考える必要もなく（要するに分らない）、いわば「しゃべりっぱなし」でかまわない訳ですが、今回は英語というもう一つの歴史と文化が介在したために、トライアングルの知的作業が要求されました。

朱先生は、この作業の意味をとて深く把握できる優れた教師で、一通りの翻訳ではとても不可能な「子ども」や「文化」の奥底にある異質性を、できる限り忠実かつ正確に伝える努力につきあってくださいました。日本語にあって英語や中国語にない幼児教育の制度や方法が生み出した概念、英語にはあるが中国語や日本語にはない「子ども」のとらえ方の違いを学生に伝えるために、学生からの質問や映像

### ●Profile

小川 博久（おがわ ひろひさ）  
日本保育学会会長  
聖徳大学教授

資料を織り込むことで創り上げていった朱先生との毎回の授業準備は、本当に心躍る楽しい作業でした。このことは、私が研究者として創り上げてきた幼児教育の体系を異文化から点検する作業であり、日本という文化の土壌で学生と分かり合い、馴れ合ってきた「いい加減さ」に揺さぶりをかける体験でした。

とくに、乳幼児の言語発達におけるリテラシー(Literacy)の概念は、東アジアの漢字文化圏にある日本や中国では、極端に読み・書き・計算の能力に偏っているように思います。それゆえ、フィンランドやカナダなどのリテラシー概念の中にある、子どもの生きる目的や社会参加が初めにあり、そのために豊かな生活体験が必要という言語発達観は、日本と同じく中国の学生にもきわめて分かりにくいようでした。ある学生は、「幼児期に十分な読み書きの技術的な習得をしたあとに、人生の目的や創造性を考えれば良いのでは？」との質問を投げかけてきました。私は、この質問に答えるために3コマの授業時間を費やしましたが、この時の授業内容はそのまま日本の学生にも通じるのでしょうか？

#### ●Profile

佐々木宏子(ささきひろこ)  
 鳴門教育大学名誉教授/環太平洋大学次世代教育学部教授  
 専門領域は幼児教育、とくに、「絵本の子どもの発達に及ぼす心理学的研究」は40年以上の研究歴をもつ。「絵本の心理学」、「子ども文化論」、「乳幼児の言語発達論」、「幼稚園と小学校の連携教育」等が現在の研究課題。

## 子どもが中心になる交流を

朴香俄

2006年、日本保育学会が韓国幼児教育学会と韓国嬰幼兒保育学会と交流の協定を結び、幼児教育及び保育の交流が始まろうとしている。謹んでお喜び申し上げたい。

私は、1980年に日本に留学し、津守真先生の研究室に入った。津守研は、すでに香港、台湾からの留学生と日本の学生がいて、その中に私が加わったので4カ国の言葉と人からなる小さな東アジアのようだった。津守先生は私たちに、「いつかは子どものことを自由に話せる交流の場を設けたいですね。昔は、日本と韓国、中国は通訳なしでもお互いに通じていたはずですよ。あなたたちが作ってください」と話されていた。私はこれだけはよく覚えている。なんとなく私たちに仕事を与えられたように思っている。

その後、韓国に帰って二十年間、自分なりに日本と韓国のことの紹介に励んできたような気がする。二十

数年前の韓国はちょうど幼児教育に関心が高まり、教育機関が急増する時期を迎え、多くの欧米の先進的な幼児教育の哲学や方法論に基づいて韓国の幼児教育の質を向上させようと頑張っていた。

一方、幼稚園創設当時から日本の影響が大きかった韓国の現場は、日本に関心を持ち続けていた。私は、大学生、教師や園長、研究者と日本の現場を見て回り、両国についての研究の成果を両国で発表した。時には日本の、時には韓国の代弁者として、日本と韓国の本当のことを知って欲しいと思っていた。身をもって経験して知っていることを正しく伝えたかったからである。見学、訪問した方々から、「自分が探し求めていたものと出会えた」とか、「とてもよい勉強になった」とか、「それぞれの国に対する見方が変わった」などと語ってくれる時にはやり甲斐を感じた。

いま、二十年ぶりに日本に戻り、一年計画の研究生活をしている私は、多くの変化を感じる。それは、日本の研究者のアジアに対する関心と活発な研究ぶりや研究成果であり、アジアの国々の研究者が日本を訪れて積極的に研究をするようになっていたからである。国際的な交流はより活発になるであろう。何より、日本と韓国は、程度は異なるものの、共通して少子化と高齢化が進み、幼児教育・保育および子育て支援などに対応策が展開されている。両国がそれぞれ費やしてきた時間の違い、観点の違い、少子化の進行の度合いによって形は同様に見えても中身は異なる様相を呈している。欧米型とは異なる、日本・韓国の歴史・文化を基盤とした子どもをめぐる社会をいかに形成するかが今の課題になっている。両国の交流がこれら課題の解決の道とともに模索するのみならず、子どもを理解するための知恵を分かち合えるような関係になることを期待する。

交流の場には、誤解されやすい風習や文化、歴史的背景に対して、理解と尊重、子どもを中心とした両国の理解を基盤にして得られた知恵を、周辺の国と共に世界へ広げようとする心構えが必要である。又、両国の研究者が互いに依存し合っていると自覚し、一緒に活動することが楽しくなり、互いに好きになることを望む。言葉も少し自由であればより楽しいであろう。

最後に、両国は学会の活動をきっかけに、'We are one in child' という感覚で交流して欲しいと思う。

#### ●Profile

朴香俄(パク・ヒャンア)  
 韓国慶南大学幼児教育科  
 日本と韓国の幼児教育・保育研究の橋渡しの役割をする。主に、伝承遊びの研究をするが、保育現場や障がいをもつ幼児の保育現場に出かけて子どもと遊ぶのが好きである。現在、教師が習うわらべうたの日韓比較研究をしている。

## 文化の狭間に身を置いて 保育・幼児教育を考えること

高 向山

私は14年前に留学で来日し、今は活動の本拠地を日本に置きながら、毎年調査や情報収集などのために母国の中国へ一時帰国している。

中国には60年以上続けられてきた全寮制の保育体制が存在しており、この体制は、戦中出兵した将兵の子を養育するために中国各地で創立された「保育院」が始まりだという説がある。中華人民共和国が建国してからは、女性の労働力も必要とするため、一気に普及された経緯がある。しかし、国の経済が発展し、一人っ子政策が実施されている今日でも、特にエリート層や裕福層などの間で高い人気を維持している。

この全寮制の保育体制は、中国では「全托」と呼ばれており、基本的には3歳以上児を対象に、月曜日から金曜日の間、園で寝泊りしながら保育及び幼児教育を受けるものである。それ以外に、日本の保育所や幼稚園に近いような保育体制をとって、園児は夕方に帰宅する「日托」と呼ばれるシステムもある。大多数の幼児はこちらの制度を利用している。園によっては両方の保育制度を導入するところもあれば、どちらか一方の保育制度を採用する場合もある。

面白いことに、私は日本にいる間は、全寮制の保育制度について知っている方々から「平日子どもを預けっぱなしして、(子どもの発達や親子関係などさまざまな意味で)大丈夫なの?」と問われる。一方で、帰国して幼稚園や子育て中の親に対して調査を行っていると、園長や全寮制保育を利用する保護者から「若い夫婦2人だけで、朝から晩まで精神的余裕のない中で戦争のように子育てして、子どもや親子関係にとって果たして良いと言えるの?」と質問される。

答えに困ってうろたえているうちに、それぞれの国や文化で期待されている、あるいは必要とされている人材がその国や文化の育て方によって育成されてきたことに気づき始めた。例えば、中国の全寮制は何も幼稚園に限らず、大学までの学府、特に進学校には必ずと言って良いほど設けられている。つまり、エリートの養成に対して、国家がある程度ビジョンをもって組織的に行なってきたのである。もちろん、エリート教育を受けたからといって、すべてがエリートになるとも限らず、個人のパーソナリティや環境要因などさまざまな要因が絡むと考えられる。

要するに、国によっては国家の根幹を担う人材を幼いときから組織的に育てようとする方針が定められているのである。そこで、日本という国にはエリートが

必要なかを改めて考えさせられた。教育における長期的な展望は何なのだろうか。20年後の国際社会における競争にはどう立ち向かうのか。今一つ見えずに不安になっているのは私だけなら良い。

日本中「地域社会で子育てを」と叫ばれているなか、現場の視点を持ちながら、政策的に提言できるよう、学術的な国際交流を続けていただきたいと切に願う。

### ●Profile

高 向山(こう こうざん)  
浜松大学健康プロデュース学部こども健康学科  
テーマ:異文化間幼児教育、異文化間移動における発達、子育て環境など  
手法:観察、インタビュー、質問紙

## 私から見た台湾の幼児教育

黄 雅琦

現在、台湾には、幼稚園に関して幼稚園設置法と幼稚教育法の二つの法令がある。幼稚園設置法は幼稚園の開園に際して資金、創立者、園の面積・設備などを定めたものである。幼稚教育法は目標、場所、園長や教師の資格などに関するものである。さらに、幼稚園教師養成課程に関する法令も幼稚教育法の中に示されている。しかし、同じ幼稚教育法の第12条によって幼稚園教師は原則として幼稚教育養成機関(大学)を卒業するものでなければ教師証書を取得できないが、専門学校や高校によって幼児教育に関する科目・単位を取得するものも教師証書がないにもかかわらず幼稚園教師として働くことができる。そのような中、台北市では3年近くの時間をかけて専門学者たちの意見を集め、幼稚園教師に関する資格の検討を行った。その結果、幼稚園教師の資格を三つに分けるようにした。大学に入学せずに幼児教育に関する専門知識を習得したものは「幼保師」と位置づけ、大学で幼児教育に関する専門知識や心理学関係を習得したものは「幼教師」と位置づけた。さらに大学院以上の場合には「高級幼教師」とすることとした。

台湾の幼稚園は学習を中心とする幼稚園がほとんどであり、小学校とつながるような勉強が多く、子どもが自由に遊べる時間は限られている。私の親戚が幼稚園を運営しているが、その園の保護者は幼稚園に対し勉強を教えることを強く求める傾向があるため、国語と算数の勉強が園生活の中心である。実は20数年前に私自身が幼稚園児だったころには、幼稚園に行けば友達と遊べる時間はたくさんあったのだが、英才教育が盛んになった現在は子どもが幼稚園で楽しく遊べる時間は少ない。最近になって、再び「遊び」が大切と考えている幼稚園も出てきたというが、「遊び」に対する定義が、私から見れば違うように見える。例として、以前修士論文作成のた

めに、協力していただいた大学の付属幼稚園の「遊び」時間を見学したときのことであった。時間割の中に、30分ほどの「自由遊び」の時間があったので、見学したところ、年中から年長のクラスの園児たちは園庭に集まると、体操着姿の先生が現れ、いきなり体操が始まった、子どもたちも違和感なく、先生の動きに合わせて、30分ほどの体操をした、このように園児全員が集まって、集団活動をするのを「遊び」と捉える例は多いようである。しかし、私から見れば、これは「遊び」ではなく、ただの集団活動に過ぎないように見えた。

以上のような背景を踏まえて、私は大学院では遊びを中心にした保育に関する研究をしている。遊びとは、日本の幼稚園教育要領にある通り子どもの「自発的活動」であり、子どもは友だちと遊ぶ中で、自主性や思いやりを育てていくと思われる。日本においてこのような遊び

を中心とした保育の実態を研究し、その意味を考えていきたい。さらに、養成課程において遊びをどのように位置づけていくかを研究していきたい。

遊びに関する研究を進めていくことによって、台湾の幼児教育の現場の実態に合わせながら、台湾でも遊び中心の保育を広げていきたいと考えている。しかし、英才教育を中心とする保育が常識とされている現状があるため、保護者にも保育者にも遊び中心の保育をどのように受け入れてもらえるようにするかということが、現在の私の課題となっている。

#### ●Profile

黄 雅琦 (こう がき)

私は台湾出身の留学生で、埼玉大学教育学研究科修士課程を修了して、現在は東京家政大学家政学研究科博士課程に在籍している。日本での研究成果や習得した専門知識を手がかりとして、台湾の幼児教育をより良いものにする仕事をしていきたいと考え、現在「遊び」の研究を進めている。